

## 編集後記

梅雨の季節になりました。いまだ新型コロナウイルス収束の兆しはなく、9つの都道府県で緊急事態宣言が延長され、東京、大阪、名古屋では大規模会場でのワクチン接種が開始されました。鹿児島県内でもクラスターが発生して現在は第4波にあり、累計感染者数は3千人を超え、本稿執筆現在223人が入院しているそうです。医療供給体制の逼迫が懸念される中、今後のワクチン接種の進捗に期待してコロナ禍が収束に向かっていくことを願うばかりです。

「誌上ギャラリー」は馬場國昭先生からの「御楼門と蓮華」です。昨年3月に復元された御楼門ですが今ではすっかりお馴染みになり、あたかも昔からあったような威容を誇っています。鶴丸城、第七高等学校造士館、鹿児島大学医学部、黎明館と変遷しましたが、お堀の蓮は御楼門に良くお似合いです。

「論説と話題」は支部会活動に関するアンケートの結果です。コロナ禍での各支部会の情報交換に役立ちましたら幸いです。

「挨拶」には4月に鹿児島大学医学部教授に就任された、泌尿器科学教室の榎田英樹先生と小児科学教室の岡本康裕先生からご挨拶を頂きました。教室のますますのご発展をお祈り致します。

「くすり一口メモ」には錠剤・カプセル剤の胃瘻・胃管からの投与、あるいは嚥下機能の低下した患者への投与に有用な「簡易懸濁法」についての解説です。従来の「粉碎法」の問題点、すなわち粉碎作業時間、投与量の減少、その他を解決する方法として、55 程度のお湯で崩壊懸濁させて投与する簡易懸濁法について、メリットと注意点について川添先生からご教示頂きました。

「学術」には医師会病院外科の石崎先生から、腹膜播種を伴う卵巣癌術後患者の十二指腸に乳頭部癌を発症し、臍頭十二指腸切除術が行われた症例報告をご寄稿頂きました。術式の決定については、卵巣癌及び

乳頭部癌の病期別生存率や、施設における手術成績、その他様々な観点から綿密に検討され、術後の経過から適切な選択であったことが検証されています。また本年4月に開催された鹿児島市外科医会春季例会のテーマ「興味ある症例」から6演題をご提示頂きました。

「切手が語る医学」には、2006年当時の小泉純一郎総理が創設した「野口英世アフリカ賞」の記念ハガキと切手です。明治時代に単身渡米し、多くの業績を残した野口英世のバイタリティーと研究に対する情熱には驚嘆します。

粟先生からは長編シリーズ「歌と写真で綴る薩摩の脇道 - 歌三昧の史跡巡礼、その4-2 - 」をご寄稿頂きました。今号では鹿児島市立美術館に展示されているブロンズ像について、鑑賞の要点などが詳しく解説されています。

「リレー随筆」には県立大島病院、竹内先生の野鳥観察への誘いです。冬の奄美大島への赴任を機にたまたま始めた野鳥観察が、双眼鏡にはじまりスマホ外付けレンズ、書籍による理論武装、観察力の鍛錬と、ハード・ソフト両面が次第に充実して本格的バードウォッチャーになっていく過程が紹介されています。毎朝珍しい野鳥を身近に感じながらの出勤はモチベーションも上がり、世界遺産奄美大島ならではの羨ましい通勤風景です。

鹿市医郷壇では会員先生がたのご投句をお待ちしております。

今やマスク、検温、オンライン会議などがすっかり定着したwithコロナの日常です。リモート学会発表は何となく要領を得ず、やはり現地参加が一番と先日も痛感したところです。コロナ禍は長期戦になる見込みと覚悟していますが、医療崩壊にだけは陥らずにこのまま日常診療が継続できることを願います。いよいよ来月に開催が迫る東京五輪は一体どうなるのでしょうか。

(編集委員 森岡 康祐)